Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-23

初めての子供を持った夫婦の出産後3ヵ月間の経験世界 : 親になるということ(1)

大久保, 功子

(Citation)
神戸大学医学部保健学科紀要,12:85-93

(Issue Date)
1997-01-24

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/00194478

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/00194478

初めての子供を持った夫婦の出産後3カ月間の経験世界

－親になるということ(1)－

大久保　功　子

はじめに

看護では，出産をめぐり親になっていく人達への援助に，心理学，社会学の分野での研究成果を取り入れてきた。しかし，ここ数年のうちに，親になることの難しさが，にわかに注目され[1)-3)]，新たな看護が必要となってきた。したがって，親になることを援助するには，看護者が実際に親になるということがどのような経験なのかを学びなおす必要がある。

研究課題

親となることを援助する手がかりを得るために，親になるということはどのような経験なのかを明らかにする。

研究方法及び研究参加者

研究方法は，経験者の主観に着目し，経験者の語る言葉に実在としての経験世界が露呈化するという，Heidegger学派現象学の立場に立った，対話的なインタビューに基づく解釈学的な記述をとった。研究参加者は，初めて満期産の正常新生児を持ち，研究への参加に同意した出産後3カ月以内の4組の夫婦と2人の母親であった。

結　果

1．子供の存在に応じて生きること

生活の中心が子供になり，親は子供の存在に応じて生きる。親にとって，子供に応じて生きることは，主導権を子供にゆずって生きることである。

「耐えるのしかないのかなあって感じ。自分の意思でどうにもならないことってあまりにも多い。妊娠とか，お産とか，子供とか。ああ全部同じじゃないとかって思った。M.M.(以下 姓のイニシャル・MotherをMと略す)」

「生活全部があの子任せって感じ。私の時間とか，睡眠とか，みんな持っていってしまう。でも，この人の存在っていうのが全て，夫と私に任せたあなた任せの人生じゃない。N.M.」

「確かに小さいんだけど，子供が中心にいろんなことが回るっていうのがある。N.F.(以下 FatherをFと略す)」

子供の存在に応じて生きることには，逃れられなさを伴っている。なぜなら，そこには，子供の生命や子供が育つことに対する責任が担われているからである。また，子供の存在を支えている存在は，自分以外にはありえないといった，専一性をおびている。

「自分がやらないと，この子は育たない。O.M.」「私がもしもここで放り投げたらこの子は生きて行けない。S.M.」「おっぱいなんか吸ってると，私が命請け負い人なんだなって思う。K.M.」「大変だからって，こればっかりは投げ出すわけにはいかない。M.F.」

親の意思で操作することを超えた，子供の主体に出会うことで，親は子供に人格や性格を見つけ，子供が人間としての可能性を秘めた存在

1．神戸大学医学部保健学科看護専攻
Faculty of Health Science, Kobe University School of Medicine, Kobe

であることに気付かされる。

「教えたわけじゃないのに，癖があったりね。別にこっちがそんな風に寝かせようと思ってやってるんじゃないのにさあ。性格持ってるんだなあって。あらためて，ああ人間なんだなって思っちゃうわけよ。N.F.」

子供の存在に応じて生きることには，子供に応じてしてあげるという応答と，子供がわかるということという2つのテーマが，インタビューデータより浮かび上がった。

A．子供に応じてしてあげること（応答）

応答は，母親と父親とでは全く異なった様相を呈している。

1）母親にとっての応答

①子供最優先の生活のペース

母親にとっては，子供の欲求が最も優先され，己を虚しくして子供のために自分を差し出す。24時間の生活のペースは子供のリズムになる。そのために，“寝ること”や“食べること”などの自分自身の欲求の充足や，家事は後回しにされる。さらに，母親自身の当たり前の欲求にさえ，母親は罪悪感を持つこともある。

「愛情持って接するとか言っても，してあげることって，前もってできなくて，タイムリーにしかしてあげることしかないじゃない。M.M.」

「自分の生活のペースが全然違っちゃって，赤ちゃんの欲求が一番先。それに慣れるまで1ケ月くらいかかるのね。自分がこれでいいんだって思えるようになるまで。とにかく夜中寝れないから，午前中おっぱいあげて，赤ちゃん寝てたら寝て，まだ洗濯もできてないとか，朝ごはん食べてないって，12時ぐらいに思うわけ。O.M.」「子供がいるのに子どものこと忘れて寝ちゃいけないんじゃないかって思ってた。M.M.」

そのような生活のペースで，自らを許容できるようになるまでには，1ケ月～2ケ月かかる。

「ペース掴むまで1ケ月半，一番辛かったかな。N.M.」

②子供への応答と自分のために生きること

母親が子供に応じてしてあげることは，母親が自分のために生きることとは相克することがある。母親の視座の方向によって，全く異なる様相があらわれる。今ここ，あるいは，今から未来に母親の視座が向いている時，母親は子供のためにできることを見いだしたり，子供と一緒にいること自体を自分の楽しみとして受けとめる。逆に，失われた過去，あるいは今までの過去に基づいた今に，母親の視座が向いている時，母親は子供のために犠牲にしていること，あるいは生きられなかった自分の可能性を見いだす。母親の視座の方向が変わることによって，母親の心は揺れ動く。「経済的には大変だけど，やっぱりなるべく子供のそばに居たいと思ってしまう。この時しかないと思うから。今を大事にしなきゃって。楽しいもの。I.M.」「自分のこともしたい，あれもしたいこれもしたい。だけど，この子がいるから，今やることが山積みあれば，やっぱり子供が優先順位一番だから。たまにかわいいと思うけど，うっとうしいと思うことが自分の心の中にある。笑ってる顔みると，またその時の気持ちは消えて，ああ，かわいいと思うんだけど，また時間が経つとどっかでね。よく母性がどうとかって，常ににこにこしてというけど，そんなことはできない。かわいいと思う気持ちと，あんたがいるからお母さんは何にもできない。それが揺れ動く。女の人にはそういうのがある。ジレンマというか。働いていた時のあれは何だみたいな。N.M.」「産んだ初日から痛いんだけど，ほんとうに（乳首を）吸われて痛くて。泣いたら吸わせるというのを繰り返して，それで母乳が出るようになったから，絶対がんばるとか思って。順調かな？って心配になったけれども，今のところ母乳だけで体重も増えてるの，順調に！I.M.」

母親は，子供のために自己を犠牲にしていること自体を喜ぶマゾヒティックではなく，自己を犠牲にして子供に自分を差し出し，その報酬として子供の寝顔や笑顔，および成長を受け取めて，喜び楽しむのである。

子供に応じてしてあげようと努力している母親にとって，周囲の人から子供の状態に関して

心配されることは，純粋な子供の状態の心配ではなく，母親が子供にしていることを心配されているように映る。したがって，母親自身が人から非難されているように思え傷つくのである。「被害妄想。人の全てが非難めいて見えちゃう。子供泣かしたくない。泣かすとおっぱい足りないんじゃない？おむつ取り替えた？寝かしてないんじゃないの？家の親とか向こうの両親とか，心配して言うわけ。あんたに能力無いからこうなるんじゃないか。おっぱいなんか出ないくせに，能力無いのに，拘ることないじゃないって聞こえるの。1カ月経って，向こうの実家に行ったときに言われた。こんな苦しい思いして，いろんなことができなくなって，自分の生活を制約して，犠牲にして，自分のやっていた仕事を犠牲にして，1カ月我慢して，言われた言葉があれだもの。N.M.」

③母親としての自信を得ること

子供のためにできることを発見することによって，母親としての自信を得ていく。抱く，おむつを替えること，授乳することに慣れることによって，子供に一方的にしてあげることに対して自信を持つ。他方，泣いている子供を泣き止ますことができることといった，一連の自分の行為の結果を子供からもらうことによって自信を得る。「赤ちゃんがめまぐるしく変わるから，それについていくって感じなんだよね。おむつの替え方とかひとつとっても，最初は全然わからないわけだから。そうするとこっちが慣れて，一つ一つやる毎に慣れていって，うまくなると自分に自信がついて，余裕が出てくる。O.M.」「おっぱいの威力が強いのかなあと思う。どんなに泣いていても，おっぱいだと泣き止んじゃうって感じ。母親っていう実感。K.M.」

2）父親にとっての応答

①おっぱいがないということ

父親は応答の中に母親との決定的な差を見つける。父親は母親と同じように，子供を抱いたり，おしめを替えたりできるが，母親と違っておっぱいをあげるための乳房を持たない。おっぱいは子供に対して絶対的な威力を持っているため，乳房を持たない父親は無力感に苛まれる。「母乳でないもん。抱くのもできる。おしめを替えるのもできる。ただ一つ気に入らないのは，おっぱいがでない。どっちが抱いたっていいんだけれども，最終的に行き着くところはおっぱいだからなあ。M.F.」「泣くことしかできないっていわれれば，確かにそれはそうなんだって思うんだけど，泣かれてさあ，なかなか抱いても泣き止まないとかさあ，男の場合はさあ，女はおっぱいやったりできるけど，男は何もできないじゃない。N.F.」

『妻と対等に育児する夫であろうとすればするほど，ぼく（あるいは雄）は，おのれの無力を身にしみて感じる。もどかしくてなさけなく，どうすることもできない。[5)]』

②子供への応答と社会の中で仕事をすること

母親と違って，父親は子供が常に最優先とはならない。母親が24時間子供と過ごしているのに対し，仕事を持つ父親は子供との生活以外の場で過ごす時間を持っている。さらに，今までの社会とのつながりの中で仕事にやり甲斐を見いだし，子供に応じてしてあげることの喜びとすることができる。したがって，父親は母親と異なり，子供への応答と仕事をすることとを同一視することが可能である。一方，労働力の再生産としての家庭での睡眠や休息が妨げられることもある。「結構夜泣きしても，全然気づかない。生まれる前と全然睡眠不足とか，負担とか生まれる前と変わらないですね。ただ，10分でも早く家に帰ろうっていうのはあります。子供の存在感はすごい大きいですね。仕事の面においても，同じ仕事をやっていても楽しいというか，やりがいがあります。K.F.」

「忙しくて，毎日，毎日仕事で遅かったでしょ。それでもってなおかつ，夜は1時間おきにあいつ（子供）が泣くでしょ。目が覚めちゃうでしょ。そうすると睡眠が妨げられちゃうでしょ。夜遅く帰ってきてから，お風呂入れているから夜型になっちゃったんだな。N.F.」

「やっぱり自分自身のことなんですよ。ぎゃー

ぎゃー泣かれると眠れないし，仕事上寝不足でミスしちゃいけないとか，プライベートで仕事上のミスが出るってことは絶対ダメっていう頭があるでしょう。今は忙しいんだからって，部屋はがたがたでもしょうがないとか，掃除できなくてもしょうがないって，妻は考えるわけですよ。俺はやっぱりきちっとしてないと落ちつけない。落ちついてテレビ見るとか，ちゃんとやっとかないとね。M.O.」

父親の子供への応答には，母親よりも選択の余地があるが，逆に父親が子供に応じてしてあげるには，母親と子供を視野に入れて，父親自身ができることを，自らの意思によって探さなければならない。

「何かしようかなって思いますけど，何かできることがないんで。自分がいくらやっても，機嫌を良くしていても，自分が抱くと泣くような感じですから。母親が抱いて泣き止むと，くそーっと思いますけどね。親父ってなんだろうって思いますけど。母親の力にはかなわないなあって。でも，今に見てろってかんじですけどね，自分がやっているのは，今はお風呂に入れるぐらいで，あとは全部母親ですから。K.F.」

「自分のやりたいようにやっていたら，全部がこうバラバラになっちゃうでしょ。両方（母親と子供）に気を使いながら，最低限の協力が必要だと思う。結局子育てはね，母親の負う役割って大きいと思うけれども，ある面やっぱり父親の役目っていうのもあるし，参加しないと，意識とか感情とかそういったものがあるかは分からないけれども，そういったものを考えると，何かやってあげなくっちゃて思う。（母親が）母乳あげている時，僕はミルク屋さんですね。だって，母乳でないもん。やらないとね。何にもしないでいると，結局生まれた時からさあ，子育て放棄しているような感じがするでしょ。実際形になって出てくると，存在するものと存在しないものとの違いだと思う。認識が変わってくる。O.F.」

B．子供がわかるということ

1）子供がわからないということ

言葉を頼りにコミュニケーションを営んでいた大人にとって，子供は今までのコミュニケーションの手段の通じない，分からない相手としてあらわれる。

「もっと，大きくなってコミュニケーションがとれてくると，分かるだろうけれど，私も慣れていないし，向こう（子供）も慣れていないし，はっきり言葉で言えないし，その辺ね，どうしたんだろうとか，どうしてあげたらいいんだろうって考える。K.M.」

「話す相手が普通の人間じゃなくて，子供だからさあ。話が合うっていうのもないしさ，ただ泣くだけだし，それが1日2日じゃなくて，毎日毎日のことになってくるわけ。N.F.」

毎日の生活の中で，分からない子供に出会うことで，親は人間としての子供のためにどうしてあげたらいいのかと考え，言葉以前の言葉を探す。この言葉以前の言葉を分かっていくには3つの様相があることが，インタビューデータより浮かびあがった。

①察するということ

「実際に毎日毎日付き合っていると，いろんな欲求とかどんどん出してくるから，アクセサリーじゃなくて，一人の人間って感じ。それを今は察してあげなきゃいけないでしょ。今はね，それに必死っていうかね。こう泣いたときに，どうして泣いているんだろうって，考えるじゃん。おむつなのか，ミルクなのか，抱っこして欲しいのか，暑いのか，いろいろ。O.M.」

「一緒にいてね。おっぱいをあげていれば，だんだんおっぱいが欲しいという様子っていうのが，掴めるようになってきたっていうのもあるし，ゲップが出て無くて，苦しくて泣いているんだなあとか，ああ，こうやって自然に分かるようになるんだなあって，今になって実感したりして。もう，いろいろ試して，泣いたらとにかく，おっぱいあげるようにして，くわえててもすごい身体をじたばたしてぐずっていて，何だろうかって思って。しばらく格好変えて抱っこしていたりしていると，急にお乳を吐いて。ああもしかしたら飲み過ぎてたのかなあって，

そういういろいろ。そばにいて見てるから分かって来るんですよね。やっぱ，いろいろ。I.M.」

親が子供を察するということは，子供の泣きを契機として，どうして泣いているんだろうと考えることから始まる。親自身が，生きている人間としての子供の欲求，感情，知覚に関して，可能的な意味を想定する。様々な可能的な意味のレパートリーの中から親自身が，いずれかの意味を子供のものとして選び取り，それに賭ける。親によって察しられた意味が，その子の意味に成るのは，その賭けた意味にそった親の行為の結果として，子供の反応が返ってきたと親が受けとめた時である。それまで，親は賭けた意味を可能性として，曖昧なままにしておくことを引き受ける。間断ないこうした賭けが，親と赤ちゃんとの毎日の生活の中で繰り返されていくことで，親は子供を分かるようになっていく。

②共有した時間と空間から脈絡をよくみること

「泣いて泣いてどうしようもなくて，どうして泣いているのか良く分からなかったの。その時，うんちが出たかったらしいんですけど。おっぱいも飲まないし，うんちもまだ出る前だから，おむつもきれいだし。どうして飲まないんだろう。分からない……。おっぱい飲むのも嫌なのかって思ったらかなしくなっちゃったね。おっぱい飲んでいても，パコパコってはずしちゃうわけ。おなかが気持ち悪くて，別のことに集中したくて，これじゃないみたいに思うだろうねえ。実際，おなかがゴロゴロゴロゴロっていっているのが聞こえるのね。だから気分が悪いんだろうなあって思う。泣いて泣いてしょうがないっていうのは，うんちの時ぐらい。15分くらい。M.M.」

泣いている赤ちゃんの姿からだけでは，泣いている子供の意味を見つけられない。「まだ，うんちが出る前でおむつはきれい。」である。実際に泣いている子供と時間と空間を共有することによって，ゴロゴロというおなかの音を聞き，わけの分からない泣きの後に，うんちで汚れたおむつを見つける。そのことで，初めて「おなかが気持ち悪い」から泣いていたという意味を発見するのである。親は，子供と共有している時間と空間，前後の状況に埋め込められた，子供にとっての脈絡をよみとる。

「口から泡を噴いている時は，本当におっぱいが飲みたい時なの。こうやってね，手，万歳している時は，本当に眠い時みたいなの。O.M.」「目が爛々としている時は絶対寝ない。ばだばたばたばたしている時は寝てくれない。O.F.」

子供との時間と空間を共有していると，子供の泣きばかりでなく，子供の身ぶりからも意味を読みとることができるようになっていく。全てが確かなものではなく，分からない部分を抱えつつも，試行錯誤を繰り返していくうちに，親はその子なりの脈絡をつけ，「本当」に分かることができた意味としていく。こうして，子供の様々な表情や身ぶりに，その親子なりのさらに多くの意味が形成されていく。

「横で，もぞもぞって始まると，あって思うから，泣く前におっぱいあげちゃったりすることがある。M.M.」「あんまりすごくは泣かないで，何となくサインを送るんで，ギャーって泣く前にあげちゃうから。本に書いてあったけど，お母さんのおっぱいが張ってくる採乳現象と，赤ちゃんのリズムが合ってくると，睡眠の浅いのと深いのの波とが合うと，赤ちゃんの起きそうな時に，目が醒めるんでしょうかねえ。何かわからないですけれども，えへっえへって時くらいには目が醒めて，ああ起きなきゃって起きれちゃう。K.M.」「寝てても，あっち（夫）は全然分からないみたいだけど，もぞもぞってすると分かって不思議ですよ。Y.M.」「本当に不思議なんだけどね，子供ができて，ちゃんと泣き声一つですぐに起きれるようになって，本当に不思議だなって思いますね。寝なくても平気っていうのもそうなんですけど，夜中すぐ起きれるのが，不思議だなあって。I.M.」

子供と一緒にいることで，子供が起きそうな時に母親は目が醒める。たとえ眠っていても，眠っているのは意思であり，子供のために生き

る母親の身体は，むしろあらゆる感覚に開かれている。母親は，子供と時間と空間を共有する中で，意思を超えた不思議な能力が母親の身体に備わっていることに気付く。

③身をもって知ること

「暑くなった時に，この子がぐったりしていたのね。本とか，室温が27度～28度で，そのぐらいでいいとか書いてあって。室温はちゃんと28度だし，おかしいなって。おっぱいも一応は飲むんだけれども，何でこんなにぐにゃーっとして，元気なくて，どっか具合でも悪いのかしらって思っちゃうじゃない。おばさんが，暑さには弱いけれど，寒さには強いけどって言っていたの。本に書いてあった通りにしちゃうじゃない。ただ暑さに弱いだけのことで，外が暑かったのが，家にも影響があっただけの話しで。冷房にあてちゃいけないって言うけど，やっぱり冷房のある部屋に連れてくるとやっぱり寝るんだよね。N.M.」

「大人だって，気持ち良ければ子供だって気持ちいいしさ，大人が暑いと子供だって暑いと思うよなあ。昼間はさあ。そんな暑いところにさあ。大人だってさあ。くたーってするんだからさあ。N.F.」

「そうだよねえ。本に書いてある通りにいかないと。クーラーにあてたって，別に死なないし，涼しい方が気持ち良いよね。短肌着一枚でも，ぐじゅぐじゅぐじゅぐじゅ泣いているからさあ，暑いときになんであんなにぐちゃりんことしているのか分からなくてさあ。何のことはない。知らないとさあ。常にあの子のことを見て行動すれば良いのに，本のこととか頭に置いちゃって見ているから。最初は何か離れて見ていた感がするもん。本や聞いたことの受け売りではなくて，今はもうその子の調子で判断してやっていけるじゃない。やっとお母さんぽくなったかなあって。N.M.」

本で得た知識を基準にしていても，実際の子供がなぜ「ぐにゃーっとしていて元気がない」のかを判断することはできない。外が暑かった時の子供の「ぐにゃー」という身体の様子が，大人の暑くて「くたー」っとする身体の様子と一致した時，判断の基準は，大人と同じ状況下での，同じ身体を持つ子供の身体の調子であるということに気付いた。すなわち，親の身体を以て知った意味を，同じ身体を持った子供の意味として捉えることによって，子供を分かることができるようになったのである。

「時間以上のものをくれる。パワーっていうのかな。だからやっていける。N.M.」

「やっと，あやすと，機嫌の良さそうな時とか，目をじいっと見て。ときどき笑う。前は寝ている時の一人笑いしかなかったんだけど，最近は目を開いている時ともニタっとすることがでてきたりして，ああ，すごいとかって。やっぱり嬉しいですよ。ああ，子どもの成長ってこんなに早いんだと思って。本当に面白くて。I.M.」

子供を分かるようになっていく過程での発見や子供の成長の発見，子供に応じてしてあげられることの発見が，親にとっての喜びとなり生きていく力となっていく。

考　察

結果から，親となることの看護援助について，正常児の親に対しての，看護婦の接する態度と，子供を分かることへの援助とに分けて考察する。

G.Caplan は，母親の精神衛生は本質的には看護の領域であり，母親の自我強度を強め，積極的に学ぶように援助するために，「かしこいお姉さん」として看護婦は接するべきだと述べ，この「かしこい姉」という精神衛生的な技術は明確でなく，看護学の課題であると指摘した[5]。しかし，未だに明らかにされていない。

本研究の結果から，上記の態度とは，「子供の存在に応じ」「子供に応じて」といった親の子供の存在への顧慮と，「子供を分かろうとする」主体性を尊重する態度であると考えられる。

以前，「あんたの乳首が短いから，子供が吸えない。」と看護婦に言われたと，泣いていた褥婦に出会ったことがある。子供の存在に応じて生きようとし，子供のために応じて答えよう

としているといった脈絡から，その言葉が褥婦にとってどう響いたかは，想像に難くない。

Fieldは褥婦の傷つき易さを指摘したが[6]，上記の脈絡は，その傷つき易さをより明確にした。したがって，親になることへの看護援助への示唆として，看護者の行為や言葉かけが，子供に応じて答えようとしている親の世界から見たら，どのように映るかを吟味した上で，それらを行う必要があるといえる。さらに，「子供のために」という親の顧慮を否定しない関わり方を，褥婦と関わる周囲の人に対して教育することも重要な看護援助であるといえる。

次に，「子供を分かろうとする」親の主体性を尊重する援助者の態度と，子供を分かるということへの看護援助とを関連づけて述べる。

親になることへの援助として，看護者は妊娠中から両親学級，母親学級，父親学級を行い，出産後は退院指導を行ってきた。しかし，我々が提供していたのは，知識と技術の内容，すなわちPolanyiの言う“knowing what”のみであり，子供との生活という経験の中で親が子供を分かっていく“knowing how”の視点を見落としてきた。[7]

親がどのように子供を分かるかは，今までの看護では着目しなかった視点だが，親自身が子供が分からないということに出会ってこそ，子供を分かろうとする主体性が生まれ，自ら子供の分かり方を発見して自から親らしくなったと感じていくことを結果は示している。よって，従来の親が困らないように知識を一方的に与えることから，看護者が親と分からなさを共有し共に学ぶ相互作用的な援助へと，看護援助のパラダイムを転換する必要性を示唆していよう。

親が子供を分かるには，親自身が子供の表している意味を察し，子供と時間や空間を共有することから脈絡を捉えたり，子供と同じ状況に自らの身体を置くことによって子供の身体の調子をみることがある。慣れという観点から，妊娠期からの援助を否定はしないが，子供と親が共有する時間や空間や状況も，親になることへの援助には重要である。健康な母子に対する医療施設での既成の看護体制や，父親の面会時間の制限に反省の目を向ける必要がある。さらに，医療からも行政からもケアの行き届かない医療施設退院後の空白期間での継続的なケアを看護に含めて行かなくてはならない。

なぜなら，子供との生活の中で親が出会う出来事から，言葉の通じない子供の表現している意味を分かるには，曖昧さ，試行錯誤，賭けるというように，意味の解釈に幅を生じているからである。また，子供への行為の結果の解釈自体が親に委ねられてもいる。このため，親にとって子供が分かれば自信を得ることができるが，分からなければ不安になるという両価性を免れることはできないのである。したがって，親になっていく人にとっては，自分の解釈やその解釈に基づくあたりまえの行為が，専門家や周囲の人といった第三者によって，保証されることが重要になるといえる。

一方では，子供に応じてしてあげることには，夫婦の間で意味が異なっている。夫婦間でお互いに相手にとっての意味を理解できなければ，夫婦は互いに孤立感を強め，相手に対して怒りさえ持つようになる。本研究の結果は，父親／母親にとっての経験世界を看護者が理解する手がかりと，相手（母親／父親）の経験世界を夫／妻が理解する手がかりを示しているとも言えよう。

本研究の限界は，研究参加者と研究者の言葉化能力に限定されるという点と，正常児の両親で夫が有職者，妻は育児休業中の対象に限られていることである。普遍化をめざすには，さらなる解釈学的な循環が不可欠である。

参考文献

1）柳沢尚代，長坂典子．様変わりする子育て－親の生活と乳幼児の育ち保健所の実態調査から－，全国保育団体連絡会保育研究所編，保育白書，草土文化，7-11，1988.

2）大日向雅美．母性は女の勲章ですか？，産経新聞，1992.

3）毛利種来．育児のエスプリ－知恵の宝箱－，新潮社，1993.
4）西　成彦，伊藤比呂美．パパはごきげんななめ，作品社，106，1990.
5）Caplan, G.（加藤正明監修，山本和郎訳），地域精神衛生の理論と実際，医学書院，1968，156-176.
6）Field, P.A. Maternity nurses-how parents see us, In ternational Journal of Nuring Studies, 24(3), 191-199, 1987.
7）Polanyi, M.（佐藤敬三訳），暗黙知の次元，紀ノ国屋書店，1992.
8）vanManen, M. Researching lived experience-human science for an action sensitive pedagogy, The althouse press, 1990.
9）Heidegger, M.（原佑編，渡辺二郎訳），ハイデガー，中央公論社，１９９３．
10）Bernstein, R. J.（丸山高司他訳），科学・解釈学・実践－客観主義と相対主義を超えてⅠ，Ⅱ，岩波書店，1990.

The lived experience of parents within 3 months after having thier first baby

– the meaning of parenting –

Noriko Okubo

ABSTRACT : This paper describes the lived experience of the four couples and two mothers who had their first baby. The research used a qualitative method in which in-depth interviews based on a phenomeno-logical approach.

The first theme emerged was that their daily life began to revolve around the existence of their baby. They have responsed to thier baby. There were distinctions between father and mother. Mother sacrificed herself to live her own baby. Consequently she might have the conflict between living for the baby and for herself. On the other hand, father had inferiority complex toward breast feeding, and realized limited ability for the baby. Instead, father had to search for his ability for the baby on his own will.

The second theme was how to understand their baby. It was started from having met the part of unknown baby, so they wanted to know baby's mind. Three patterns were identified; 'reading the baby's mind (Sassuru)', 'reading the context of the baby's on time and space that parents have coexisted with their baby', and 'putting themselves in the baby's place'. Parents were encouraged by themselves as founding out thier own baby's as a human being, growth and development, and possibility. It brought about a pleasure in discovery such things.

Key words : lived experience,
parents,
first baby,
phenomenological research

1. Faculty of Health Science, Kobe university School of Medicine,